

# 阿Qは何を意味しているのか — 『阿Q正伝』の構造を手掛かりに—

What is the exact meaning of Ah Q?  
— A Study on the structure of *The True Story of Ah Q* —

張 瓊華  
Qionghua ZHANG

*Keywords* : structure, spiritual victory, onlookers, revolutionary motivation

キーワード : 構造、精神勝利法、見物衆、革命の動機

## 1. はじめに

阿Qは、魯迅の小説『阿Q正伝』の中の登場人物である。『阿Q正伝』は魯迅の代表作の1つであるのみならず、中国近代文学の傑作の1つとも言える。この小説は1921年12月4日から1922年2月12日まで北京『晨报復刊』に連載され、その後魯迅の小説集『呐喊』に収められている。これまで『阿Q正伝』に関する研究は多くあるが、そのほとんどは阿Qの精神勝利法に着目している。それ故、阿Qは精神勝利法の代名詞ともなっている。代田が述べているように、「世界文学には、人類の様々な特徴を典型として彩る登場人物たちがいる。優柔不断の苦惱型、シェイクスピアのハムレットとか、主観的幻想に満ちた猪突猛進型、セルバンテスのドン・キホーテとか。彼らの名前は、個人の性格を評する時、レトリックというより、ほとんど形容詞のように使われるだろう。魯迅の『阿Q正伝』の阿Qも、そうした末席を汚しているといえるのだろうか」（代田、2006、79頁）。

しかし魯迅自身は、1925年5月26日に「俄文訳本『阿Q正伝』序及び著者自叙伝略」の中で次のように述べている。「私は努力してみているが、近代、我が国民の魂を描き出せるかにはそれほど自信がない。他の人たちがどう思っているか分からないが、私から見ると、私たち人間と人間との間にまるで高い壁があり、それがお互いを分離し、理解し合えないようにしていると思う。古代の聖賢が人を十等級に分け、それぞれ違うと言う。その言い方は現在すでに存在していないが、その魂は依然として存在しており、しかも一層ひどくなり、人間の体さえ等差があり、手が足を下等の可笑しなものとみなしている。造化主が人を巧妙に作って、人に他人の肉体的苦痛を感じさせないようにしている。聖人と聖人の弟子はその不足を補い、さ

らに人に他人の精神的苦痛を感じさせないようにした。……現在私たちが知っているのは何人かの聖人の弟子の見解と道理に過ぎない。それは彼ら自分自身のためのものである。庶民はただ黙々と生き、そして枯れ、黄ばみ、死んでいく。まるで大きな石の下の草のように、すでに四千年が経つ。……将来、壁に囲まれた民衆が覚醒し、出てきて主張をするだろう。しかし、現在はまだない。それで私は、自分の観察により、孤独に、とりあえずこれらのことを書き、自分の目で見た中国人の人生とする」(魯迅、1925、355頁)。このように、実際、魯迅は国民の魂を描き出したいと明言している。では、国民の魂とは具体的に何を指しているのであろうか。もし精神勝利法だけならば、主人公の阿Qのみならず、まわりの人たちも精神勝利法を有しているのが当然であろう。また、小説を丹念に読んでいくと、いくつかの疑問が出てくる。

第一に、魯迅はなぜ序章でわざわざ小説の題名を『阿Q正伝』にした理由を述べているのか。しかも、そのQは洋字のQueiを略したものだとはっきり書いている。

『阿Q正伝』の題名には「阿Q」の意味と「正伝」の意味が隠されているように思える。前者の場合で言えば、そもそも中国は漢字の国であり、ローマ字で名前をつけたりはしない。魯迅が書いた小説の中によく知られている主人公で、たとえば、孔乙己(『孔乙己』)、老栓(『薬』)、閻土(『故郷』)、祥林嫂(『祝福』)などの名前は、例外なく漢字が使われている。しかし『阿Q正伝』の中では、主人公の名前を阿Qにただけでなく、小説の題名までにしたのはなぜなのか。阿Qという名前については、魯迅は小説の序章で3つの理由をあげている。1つ目は、阿Qの姓が分からないからである。2つ目は、名前の書き方が分からないからである。生きている時に、阿Queiと呼ばれていた。それは阿桂なのか、それとも阿貴なのかよく分からない。そこでイギリス流の綴り方で彼を阿Queiと書き、略して阿Qとした。3つ目は、阿Qの本籍地を知らないからである。しかし、小説はフィクションであり、阿貴にしても、また阿桂にしても構わない。なぜ、ここでわざわざ「イギリス流の綴り方で彼を阿Queiと書き、略して阿Qとした」と書く必要があるのか。いくら近代になって欧米文化に接触したからとはいえ、魯迅は何の理由もなく阿Qという名前をつけることはありえないであろう。果たして阿Qを、ある人物の名前のみとして読んでよいのか。

後者の「正伝」の場合、魯迅自身は序章で次のように述べている。孔子曰く「名正しからざれば即ち言順わず」と。伝記の題名は数知れず、列伝、自伝、内伝、外伝、別伝、家伝、小伝などがあるが、すべて不適切である。そこで通俗小説家のいわゆる「閑話休題、言帰正伝」という決まり文句から、「正伝」二文字を取り出し、題名としたというのである。「言帰正伝」は、本来余談はさておき、本題に入るという意味で使われているので、ここでもその意味を伝えるためのものだと考えられる。では、その「本題」は具体的に何を指すのであろうか。

第二に、阿Qが精神勝利法の典型であるならば、小説のプロットは一貫してそれを中心に展開すべきであろう。しかし『阿Q正伝』は、序、勝利の略歴、続勝利の略歴、恋愛の悲劇、暮らしの問題、中興から末路まで、革命、革命の禁止、大団円の九章によって構成されている。

序章を除いて、内容は、大きく精神勝利法（第二章と第三章）、恋愛と暮らしの問題（第四章、第五章、第六章）、革命の問題（第七章、第八章、第九章）の3つのテーマに分けられる。つまり、精神勝利法の典型を主題としていると見るならば、構造的に整合性がなく、統一感が見られないのである。実際小説全体は多層構造をなしていて、精神勝利法以外のものが多く含まれている。そのため、全体の構造を解明しない限り、阿Qの意味を解くことができないのであろう。

第三に、最終章が「大団円」となっているのはなぜなのか。中国では、「大団円」は小説、映画や劇などで、登場人物が様々な出来事を経験し、最終的にはハッピーエンドに終わることを意味する。しかし、この小説の最終章において、阿Qは処刑され、悲劇に終わった。それにもかかわらず、「大団円」にしたのには、何らかの意味が秘められているのであろう。

しかし、これらの問題は、従来ほとんど言及されてこなかった。本稿では、『阿Q正伝』の構造を手がかりに、その3つのテーマの展開に沿って検討し、それらの構造を貫くものを明らかにすることにより、阿Qの真の意味を考察したい。

## 2. 阿Qの精神勝利法

精神勝利法は小説の序章と第四章でも少し触れているが、主に第二章と第三章で展開している。しかし両章の構造は異なっており、第二章では、未荘という田舎の村を舞台に阿Qと閑人たちが登場し、また場として酒屋と賭場が設定されて、阿Qの精神勝利法がいくつかの側面から描かれている。第三章では、異なる階層の人が登場し、阿Qとどう関わっているかを描写している。以下では、小説のプロットに触れながら<sup>1)</sup>、その精神勝利法を検討してみよう。

### 2.1 精神勝利法と閑人たち

阿Qは姓名、本籍が曖昧のみならず、氏素性も不明である。未荘の人々は、阿Qに手伝いを頼むか、彼を笑いものにするかのどちらかで、彼の氏素性などに気にも留めない。もちろん、阿Q自身も言わない。阿Qは家がなく、土地神様の祠に住んでおり、決まった仕事もなく、日雇い仕事をして暮らしている。人と喧嘩する時、阿Qは「昔は、お前たちなんかよりずっと金持ちだったんだ。お前たちは何者だい」と目を剥いて言う。阿Qのこの言葉から、閑人たちがお金の有無で人をいじめていることが読み取れる。いじめられる側の阿Qは過去の栄光をもって言い返し、精神上での優位を勝ち取るのである。

実際、阿Qはプライドが高く、見識も広い。県庁所在地に何度か行ったことにより、世間知らずの未荘の連中を見下している。彼は、未荘の誰一人として眼中になく、さらには将来、恐らく秀才になるかもしれない二人の「文童」のことも歯牙にもかけぬという態度だった。阿Qは「俺の息子ならもっと偉くなるぜ」と考え、未来に託すのである。

また、阿Qは働き者である。臨時雇いとなって、麦刈りなら麦刈りを、米つきなら米つき

を、舟こぎなら舟こぎをしていた。村人は忙しい時、阿Qを思い出すのであるが、閑になれば、阿Qのことをさっさと忘れてしまう。ただ一度だけ、ある老人が「阿Qは実に働き者だ」と褒めたことがある。それを聞いて、阿Qは大喜びしていた。

阿Qは、昔は金持ちで、見識が広く、しかも「働き者」なので、惜しいことに身体上の欠点がある。それは頭の地肌に疥癬後の禿がいくつもできていることである。それで、彼は「禿」という言葉とそれに近い発音をすべて忌み嫌い、さらに禁句の範囲を押し広げて、「光る」も、「明るい」も、さらには「灯り」や「ロウソク」までも禁句にした。ひとたびその禁句を口にする者がいれば、故意であろうと、そうでなかろうと、阿Qは怒り出し、相手を見て、口下手なら怒鳴りつけ、弱そうなら殴りつけた。しかしどういうわけか、いつの間にか睨みつけることに改めた。阿Qが睨みつけ主義を採用すると、未荘の閑人どもはいっそう彼をからかい出す。会えば必ず驚いたふりをして「おや、明るくなったぞ」と言う。阿Qはいつものように怒り出し、相手を睨みつける。閑人どもはそれで終わらず、からかい続けるので、ついに殴り合いになる。阿Qは形式上打ちのめされて、相手に弁髪を掴まれ、壁に四、五回頭突きをさせられ、こうして閑人がようやく勝利し、満足して帰って行く。

このように、身体上の欠点も閑人たちからかわれ、殴られる原因となる。その際、阿Qはこう考える。「結局、俺は息子に殴られたようなもの、今の世の中、間違っている」。つまり、この状況に置かれた阿Qは、世の中のせいにすることで、精神的に楽になれるのである。

阿Qを嘲る閑人たちは、彼にこんな精神的勝利法があることを知っていて、彼の弁髪を掴むたびに、こう言い聞かせる。「阿Q、これは息子が親父を殴るんじゃないぞ、人間が畜生を殴るんだ。自分で言ってみろ」。すると、阿Qは両手で自分の弁髪の付け根を押さえ、首をねじってこう答える。「虫けらを殴る、これでいいか？俺は虫けらだ。早く放してくれよ」。しかし閑人たちは放してくれない、相変わらず壁に彼の頭を五、六回ぶち当てなくては、満足し、勝利の凱歌とともに去ろうとしない。閑人たちは、今回こそ阿Qを懲らしめてやったと考えていた。しかし、十秒も立たないうちに、阿Qも満足し、勝った気分で去って行く。なぜならば、阿Qは自分が自己軽蔑の第一人者であり、「自己軽蔑」を取ってしまえば、残るのは「第一人者」であり、状元だって「第一人者」ではないかと思っているからである。

阿Qはこうして様々な奇計で怨敵に打ち勝つと、楽しそうに酒屋へ行って、お椀で二、三杯の酒を飲み、他の客をからかい、口喧嘩をして、まともな勝利を得ると、楽しそうに土地神様の祠に戻り、ひっくり返って寝てしまう。

お金があると、阿Qは博打を打ちに行き、大勢の人が地面にしゃがみ込んでいる中、満面汗を流しながら、一番大きな声でこう叫ぶのだ。「青竜に400」、「ソーレ、開けたー」、壺の蓋を開けられると、阿Qのお金は他の人のものとへと消えていく。彼はついに群衆の外へと押し出され、後ろに立って見物し、他人の儲けにやきもきする。終わってから、後ろ髪を引かれる思いで祠に戻り、翌日は腫れた目で仕事に出かける。不幸にも一度は勝ったというのに、結局はほとんど敗北に終わった。それは未荘の祭りの夜のことだった。この夜、芝居の舞台の近くに

は、多くの賭場が開かれた。芝居の銅鑼や太鼓の音も、阿Qの耳には十里も遠くに聞こえ、聞こえるのは胴元の歌ばかりである。彼は勝ちに勝ち続け、銅銭は十銭銀貨に、十銭銀貨は一元銀貨へと変わり、一元銀貨は多くなり、彼は大喜びした。その時、人が喧嘩を始めた。だが、彼にはそれが賭場のお金を取りあげる手口であることが分からなかった。怒鳴り声に殴り合い、足を踏みならす音、しばらく大混乱が続き、彼が這い上がってきた時には、賭場は消え、群衆も消えていた。身体のあるところが痛むのは、殴られたり蹴飛ばされたりしたからだろうが、数人の者が不思議そうに彼を見ている。彼は呆然と祠に戻ったが、落ち着いて考えると、彼の銀貨の山が消えたわけが分かった。しかしその時、息子に持って行かれたと言っても、やはり気が減入るし、自分は虫けらだと言っても、相変わらず気が減入る、というわけで、彼は今回敗北の苦痛を味わった。だが、彼は直ちに負けを転じて勝ちとした。彼が右手を振り上げ、力いっぱい自分の顔を二、三発殴ると、カッと熱い痛みが走り、その後、気持ちも落ち着いてきたのは、殴ったのは自分で、殴られたのはもう一人の自分のようだが、やがて自分が他人を殴ったかのような気持ちになったからである。このようにして彼は精神的落ち着きを取り戻したのである。

まわりの閑人どもは、いつも阿Qを嘲り、いじめる。普段よく行く場である酒屋は、互いにかからったり、喧嘩したりする場でもある。また賭場は、巧妙な手口での騙し合いの場である。この章では、社会の底辺に生きる弱者の生態と、その問題を暴き、その環境が弱者の精神処理法を生み出していることを描き出している。

## 2.2 人生の屈辱と忘却

第三章では、異なる階層と立場の人物が登場し、それぞれがどのように阿Qを扱っているのかを描いている。趙旦那と錢旦那は、未荘で一番権威のある人で、上層に属している名士である。秀才は、趙旦那の息子で、官僚の採用試験である科挙試験の最下位レベルに合格した者で、伝統的知識人の代表とも言える。偽毛唐は、錢旦那の息子で、海外に留学したことがあり、いわゆる近代的知識人である。王胡は、阿Qと同じく社会の底辺層にいる者である。若い尼は、寺の者である。以下では、物語の展開に沿って具体的に見てみよう。

魯迅は序章でこう語っている。ある時、趙旦那の息子が科挙の秀才になった時、銅鑼を打ち鳴らして合格の知らせが村に届くと、阿Qはちょうどお酒を飲んだ後、躍り上がり、趙旦那とは同族で、長幼の序を細かく言えば、彼は秀才よりも三代上なのだと言った。長幼の序を重んじる中国社会では、三代上ならば、本来趙旦那からも、秀才からも尊敬される立場になるはずである。ところが翌日、趙旦那に呼び出され、「わしにはお前みたいな親戚があつてたまるか。お前の姓が趙だと」と怒鳴られ、平手打ちを食らわせられた。それに続いて、第三章では次のように描いている。阿Qは常に勝ち続けたとはいえ、趙旦那に顔面に一発お見舞いされてから後、ようやく有名になった。殴られてから、阿Qは暫くしてこう考えた。「今の世の中、間違っているよ、息子が親父を殴るんだ」、ふっとこの偉い趙旦那が、今では彼の息子になったか

思うと、自分でも次第に得意になってきた。その後、歌いながら酒屋へと向かった。この時には、彼は再び趙旦那が皆より一段偉い人と思った。この出来事以来、村人たちは阿Qをことのほか敬うようになった。

未荘の慣例では、誰が誰を殴っても、事件とみなされない。しかし趙旦那のような名士と関わりがあるなら、村人の噂になるのである。阿Qが悪いという点に関しては、当然言うまでもない。村人はひょっとして阿Qが本当に趙旦那の同族かもしれないと思い、阿Qに敬意を表するようになった。阿Qはその後何年もの間、自慢気であった。ここでは、趙旦那、阿Q、村人の三者の関係と問題を描き出している。阿Qは、権威のある者とのつながりがあることを自慢する。権威のある者は、阿Qを軽蔑し、自分と同じ姓を名乗るのも許せなかった。村人は、是非善悪を問わず、偉い人とのつながりがあれば、尊敬に値すると考えていた。

しかし、阿Qの精神勝利法は失効する場合もある。それは王胡との競争で負けた時と、偽毛唐に叩かれた時のことである。第三章での語りによると、ある年の春のこと、彼がほろ酔い気分でも通りを歩いていると、塀の下の日だまりで、上半身裸になり虱を取っている王胡を見かけた。すると彼もそこに上着を脱ぎ、虱を取り始める。しかし、洗い立てのためか、集中力に欠けるためか、三、四匹しか捕まらなかった。一方、王胡はピチピチと音を立てて噛みつぶしている。阿Qは、最初のはがっかりしていたが、そのうちに怒り始めた。彼は服を地面に叩きつけると、ペーと唾を吐き、「この毛虫」と言った。王胡は軽蔑のまなざしで答えた。「禿犬、誰のことを言っているんだ」。趙旦那と同じ姓のお陰で、阿Qは人から多少の敬意を受け、自分でもいっそう自慢気だったものの、こんな生意気なことを言わせるもんか。彼が立ち上がると、両手を腰に当て、二人は喧嘩になった。王胡は五回も阿Qの頭を壁に打ち付け、さらに思い切り阿Qを二メートルも突き飛ばした後、満足そうに去っていった。王胡の地位は阿Qとほぼ同じか、阿Qより下かもしれない。これまで阿Qは、王胡を馬鹿にしたことがあっても、王胡に馬鹿にされたことなどはなく、まして手を出されたことなどはなおさらなかった。これは阿Qにとって、人生最初の屈辱となり、精神勝利法も失効してしまった。

王胡との競争、闘いで屈辱を味わった阿Qは、呆然と立っていた。その時、遠くから錢旦那の息子がやってきた。彼は県庁所在地にある西洋式の学校で勉強した後、なぜか日本に行き、半年後帰ってきたには、曲がっていた膝が毛唐人のように伸びており、弁髪もなくなっていた。今はかつらの弁髪をしている。阿Qは彼を「偽毛唐」と称し、「外国と内通している奴」と呼んでおり、彼を見るたびに、必ず腹の中で秘かに罵倒していた。阿Qから見れば、弁髪が偽物なら、人間たる資格はない。その偽毛唐が近づいてきた時、阿Qは仕返ししたかったので、小さいながら声を出し、「禿頭、阿呆」と言った。だが逆に、ステッキで自分の頭に打ち込まれた。「あいつのことだよ」と、阿Qは近くの男の子を指して、弁解した。パンパンッ！阿Qの記憶において、これは恐らく人生第二の屈辱であろう。

2つの屈辱を経験し、しかも精神勝利法が失効したため、阿Qはその屈辱を忘却することにした。王胡と偽毛唐に殴られた後、静修庵の若い尼さんがやってきた。阿Qは普段でも、彼女

を見れば必ず罵倒するのだから、屈辱の後となればなおさらであった。「何で今日についてはいいかと思ったら、こいつに会ったから」だと彼は考えた。近寄ると、彼は音を立てて唾を吐いた。若い尼さんは全く相手にせず、うつむいたまま過ぎていく。阿Qは突然手を伸ばして彼女の剃り立ての頭を撫で、へらへら笑って言った。「つるつる頭、とっとと帰れ、坊さんが待っているぞ」。尼さんは顔を真っ赤にして、「痴漢みたいことをしないでよ」と言いながら、大急ぎで逃げていく。すると、酒屋の客は皆、大笑い。阿Qはいつそう得意になって、さらにこれらの観衆たちを満足させようと、再び力いっぱいねってから、ようやく手を放した。このことで、彼はすっかり王胡を忘却し、偽毛唐も忘却した。このように、阿Qは自分より強い者に侮辱されたら、八つ当たりの対象として、自分より弱い者をいじめることになる。

### 3. 恋愛と暮らしの問題

第四章から第六章までは恋愛と暮らしの問題を語っている。以下ではそれを検討する。

#### 3.1 求愛事件

若い尼さんに「罰当たり、子孫が絶える阿Q」と言われた。そこで、阿Qは、「女が要るんだ、子や孫が絶えたら誰も茶碗いっぱいのご飯を供えてくれない。そもそも不孝に三あり、跡継ぎがないことは一番の不孝である」と考えるようになった。

この日、阿Qは趙旦那の屋敷で米をつき、夕食を食べてから、台所で腰掛けて煙管を吸いながら、女中の呉お婆さんと世間話をしていた。その時、阿Qはいきなり呉お婆さんに迫っていき、彼女の前でひざまずいた。「二人で寝よう、俺とお前で寝よう」と求愛した。呉お婆さんは驚いて叫びながら外に飛び出した。阿Qは、まずい、と気づき、慌てて煙管を腰の帯に差し込むと、米つきに行こうとした。ゴツンと音がして、頭に重いものが落ちてきたので、彼が急いで振り返ると、秀才が天秤棒を持って目の前に立っている。「とんでもない奴だ、お前という奴は」、天秤棒がまたもや頭上に振り下ろされた。阿Qは台所から飛び出した。

求愛が失敗した阿Qは、米つき場に飛び込むと、「女」という考えも消えていた。しかも殴られ、罵倒され、すでに一件落着のようで、かえって何の気配りもなくなったため、米つきに取りかかることにした。その時、外が騒がしくなったので、それを見て阿Qはハッと気づいた。この騒ぎは自分が先ほど殴られたことと関係がありそうだ、ということだった。彼は身を翻してその場を去り、米つき場に逃げ帰ろうと思ったが、天秤棒が彼の退路を塞いだので、彼は再び身を翻してその場を去り、裏門から出て、土地神様の祠に戻った。

本来、恋愛は人間の感情レベルのことであるが、阿Qが呉お婆さんを求めたのは、『孟子』の中でよく知られている「不孝に三あり、跡継ぎがないことは一番の不孝である」という聖賢の名言に強く影響されているからである。

### 3.2 食を求めて未莊を離れる

求愛事件の後、村人は阿Qを避けるようになり、阿Qも少し変だと感じた。第一に、酒屋がつけで飲ませなくなった。第二に、土地神様の祠の番をしている老人が、ぐちゃぐちゃ言い出し、彼に出て行ってほしいらしい。第三に、誰も彼に日雇い仕事を頼まなくなった。酒屋がつけで飲ませないのは、我慢すればよいのだし、老人の催促は、聞き流しておけばいいのだが、仕事がないのは困ることになる。阿Qは我慢しきれず、得意先を訪ねて回ったところ、「仕事なんかない！帰れ、帰れ」と言われた。得意先は、これまで多くの手伝いを必要としていたのに、急に仕事なくなるはずがない、その裏に何かがあるに違いない。よく聞いてみると、なんと得意先は用事があると、皆、Dさんに頼んでいることが分かった。Dさんは、痩せっぽちで仕事の要領が悪く、いつも阿Qに見下されている。そこで喧嘩になり、この「竜虎の闘い」は勝敗も定まらず、観客の満足度も分からず、とくに評判にもならなかったが、阿Qにはその後誰も仕事を頼まなかった。

彼は食を求めて遠出することにした。少し歩くと、静修庵の大根畑まで来た。阿Qは大喜びで、大根を抜き始めた。その時、若い尼さんが現れた。「阿Qよ、お前がこの畑に忍び込み大根を盗むとは」。阿Qは逃げながら振り返って言った。「これがあんたのものかい？それならあんたが呼べば返事をするのかい」と。阿Qが言い終わらぬうちに、黒犬が追いかけてきたので、さっさと逃げ出した。彼は、歩きながら大根を食べ、県庁所在地に行く決意を固めた。

こうして、阿Qは恋愛事件を起こしたため、仕事を失った。その上それに対する反省もなく、自分と同じ境遇に置かれている者と闘いになった。それでも仕事がなかったため、空腹になり、静修庵の大根を盗んだ。ここで作者は、阿Qを通して、社会の底辺に生き、同情すべき境遇に置かれているにもかかわらず、同情に値しない人々を描き出している。

### 3.3 阿Qに対する村人のまなざしの変化

再び未莊に現れた阿Qは、村人に敬意を払われることになった。それは、県庁所在地の拳人旦那のお屋敷で働いていたことや革命党の処刑を見たことがあるからである。

酒屋に現れ、カウンターに近づいた阿Qが、腰から手を出すと、銀貨や銅貨を驚づかみしており、これをバラバラッとカウンターにばら撒くと、「現金だ、酒をくれ」と叫んだ。着ているのは新品の裕の上着で、腰には巾着まで提げている。「儲かっているようだ、どこで」と酒屋の主人は声をかけた。阿Qは「県庁所在地に行ってたのさ」と返事した。このニュースは、翌日には未莊全村に知れ渡った。村人は、皆現金と新品上着の阿Q中興の歴史を知りたがり、酒屋で、茶館で、そしてお寺の軒下で、探りが入れられた。その結果、拳人旦那のお屋敷で働いたことが分かった。この一言に、聞く者は皆、肅然として襟を正した。

阿Qは県庁所在地での見聞を村人に語る。「お前たち、首切りなんか見たことないだろう？そりゃもう、面白いんだ。革命党の首を切る。まったく、面白い、面白い」。この時の阿Qが村人の眼中に占める地位は、趙旦那を超えるとは言えないまでも、大差はないであろう。



阿Qは、県庁所在地から古着を持ってきたため、未荘で人気者になった。村の婦人たちも、顔を合わせると、必ず皴七お婆さんが阿Qから紺色の絹のスカートをわずか90銭で買ったと噂し合った。こうして彼女たちは血眼になって阿Qを探し、彼から物を買おうとする。遠くから彼を避けるどころか、道行く阿Qを後ろから呼び止めて追いつき、古着がまだあるかどうかを聞く。趙旦那の奥方まで彼から買いたがったが、買えなかったので、趙旦那はひどく失望し、怒りと不安で、あくびするのをやめてしまった。秀才も阿Qの態度に対し、たいそう不満で、「この大馬鹿野郎に気をつけて、いっそう未荘から追い出してやろうか」と言った。

皴七お婆さんは翌日に阿Qの怪しい点を言いふらした。これは阿Qにとってはたいそう不利である。村人の彼に対する敬意は打って変わり、関わりたくないという態度が見え見えである。さらに閑人どもは阿Qの事情をとことん追求したがった。阿Qも隠せず、偉そうに自分の経験話を話した。こうして閑人どもは、阿Qが小者に過ぎず、塀を登れぬばかりか、単なる穴の外に立って盗品を受け取る役に過ぎなかったことが分かってきた。ある夜、彼が一包を受け取り、本職がもう一度忍び込むと、中で大騒ぎが始まったので、阿Qは大急ぎで逃げ出し、未荘に帰った。「今後はもう二度とやらない」と。しかし、この話が阿Qにとってさらに不利となった。というのは、閑人どもにとって、二度と盗みを働かない泥棒には敬意を払えないからである。

県庁所在地から戻ってきた阿Qは、お金もあり、革命党の首切りを見た、そして盗品の古着を持っていたため、村人に尊敬のまなざしを向けられた。しかし二度と盗みに関与しないと、皮肉なことに、阿Qを見るまなざしがまた急に変わった。これが村の閑人どもである。

## 4. 革命へ

第七章から第九章では、阿Qの革命への動機、革命が禁止されたこと、そして生け贄となって処刑されたことについて語っているが、実際、他の人の動機、見物衆の様子も描いている。

### 4.1 革命への動機

第七章の物語は、宣統3年9月14日に、拳人旦那の船が趙家の船着き場に着いた、未荘の人々に不安をもたらしたことから始まった。この年は、ちょうど辛亥革命が起こった年である。清王朝を倒し、近代国民国家を確立しようとするこの革命に対する民衆の反応をこの小説から垣間見ることができる。ここで登場しているのは阿Q、秀才、偽毛唐などである。では、それぞれが革命にどのように関わっていたかを小説のプロットに沿って見てみよう。

この日、真っ暗闇の中に船が到着し、県庁所在地の拳人旦那は革命党が入城する前に、財産を田舎に隠そうとし、いくつかの箱と手紙一通を船で運んできて、趙旦那に預けたいと考えた。趙旦那はじっくり考えて、自分にとっても悪くないと考え、箱を預かることにした。

阿Qは、もともと革命党は謀反であり、謀反は彼にとっても良くないと考え、深く憎んでい

た。ところが、名高い拳人且那もこれほど恐れていると思うと、阿Qも革命への「憧れ」は禁じがたく、さらに未荘の人々の慌てふためいた様子を見ると、「革命も悪くない」、「この畜生どもの命を革めてやるんだ」と、革命党に参加したいと思うようになった。

最近の阿Qは、やり繰りが苦しく、不平を抱いていたところに、酒も飲んだので、突然革命党とは自分のことであり、未荘の者は皆彼の捕虜であるかのような気がしてきた。思わず大声で叫び出した。「謀反だぞ、謀反だぞ」。未荘の人々は、皆恐怖のままざしで彼を見た。そんな哀れなまざしを、阿Qはこれまで見たこともなく、真夏に氷水を飲んだ良い気分になった。彼はいっそう愉快になって歩きながら「よし、欲しいものは俺のもの、好きな相手も俺次第、鉄の鞭でお前を」と叫んだ。人々はますます阿Qを恐れるようになった。

翌日、何もかも従来通りである。阿Qは相変わらず腹ペこで、なんとなく静修庵まで来てしまった。しかし、そこはすでに秀才と偽毛唐によって革めたと言われた。

その日の午前、秀才は早耳で、革命党が夜に入城したと聞いて、弁髪を頭のとっぺんにグルグル巻きして、これまで仲の悪かった偽毛唐を尋ねた。二人は話がぴったりと合い、たちまち意気投合した同士となって、一緒に革命に参加すると決意した。二人はよくよく考えた末、静修庵に「皇帝万歳万々歳」と書いた木牌があり、それはただちに打ち壊さなければならないと思いつき、そこに行った。尼さんがあれこれ言うので、二人は彼女を清政府側とみなし、その頭にステッキと拳骨をたっぷりお見舞いした。尼さんは二人が引き上げた後、気を静めて調べてみると、木牌が地面で粉々に砕かれているだけでなく、観音像の前の宣徳炉も消えていた。

辛亥革命の際、未荘では、阿Q、秀才、偽毛唐の三人が革命をしようとした。阿Qの動機は、自分をいじめる嫌な奴をやっつけ、欲しいものを手に入れる。秀才と偽毛唐の革命は静修庵にある「皇帝万歳万々歳」の木牌を壊し、尼さんを殴り、ついでに宣徳炉という骨董品を持ち去ることであった。この革命は形式的であり、盗みが伴う行為である。実際、中国の四千年の歴史の中でたびたび起こった農民蜂起も同じ行為を繰り返してきた。

## 4.2 革命と未荘の変化

「革命禁止」の第八章では、革命党が入城した後の変化と状況が描かれている。具体的には未荘の人々の耳に入った県庁所在地の変化と、未荘の変化、状況となっている。

県庁所在地から伝わってくる噂によれば、革命党は入城したものの、とくに大きな変化はないという。県知事は元の職にとどまり、ただ職名が何とか言う名前に変っただけ、しかも拳人且那も何とか言う官になり、兵隊を指揮しているのも以前の隊長のままである。ただ1つだけ恐ろしいことがある。それは弁髪切りを始め、隣村の七斤さんも見苦しい姿になった。未荘の人はそれを聞いて、県庁所在地に行くのを避けるようになった。

未荘の変化と言えば、2つあげられる。1つは、弁髪を頭のとっぺんでグルグル巻きしたり結んだりする人が出て来た。最初は秀才で、その次が趙司晨、趙白眼、阿Q、Dさんであった。

この数日間、県庁所在地に行ったのは偽毛唐だけであった。秀才は本来預かり物のご縁を頼って、自ら拳人旦那を訪問したいのだが、弁髪を切られる危険があるため、中止した。彼は格式張った手紙を書き、偽毛唐に託して県庁所在地まで届けてもらい、また彼に紹介を依頼し、自由党に入った。さらに偽毛唐に銀貨四元を払い、銀桃を胸にぶら下げることができた。そのため、趙旦那は息子が初めて秀才に合格した時よりも遙かには羽振りがよくなり、何者も眼中にない。阿Qは、革命をするには、単に弁髪グルグル巻きでもだめなので、まず革命党と近づきになるべきだと悟った。しかし偽毛唐を尋ねたら、追い出され、革命に参加することが禁止された。彼はもう他に道はなく、今後白い兜に白い鎧の革命党が彼を呼びにくる希望も持てず、彼のあらゆる抱負も、希望も、前途もすっかり消されてしまった。

もう1つは、趙家が略奪されてしまったことである。暗闇の中、物音が聞こえた。野次馬根性のある阿Qは音のする方へと直進した。逃げてきたDさんは「趙……趙家で略奪だ」と言った。阿Qは、近づいてよく見ると、白い兜に白い鎧の者が大勢、次々と箱を担ぎ出し、道具類も担ぎ出していく。祠に戻った阿Qは、白い兜に白い鎧の革命党は確かにやってきたというのに、自分に何の挨拶もなく、上物をごっそり運んだというのに、自分の分け前はない。それはすべて偽毛唐が、俺の謀反を禁止したためであり、さもなければ、今回どうして取り分さえないのかと、考えれば考えるほど腹が立つのだ。俺が必ず訴えてやる、お前が県庁所在地に引っ張られ、首をはねられるのを見てやる、と思った。

革命の流れの中で、旧支配層はそのまま新支配層へと変身し、いわゆる革命党は夜中に略奪をし、下層の者は、革命党に近づく術もない。この章では、この形式的で、しかも略奪行為の伴う革命の本質を暴いている。

### 4.3 大団円

趙家が略奪に遭ったことで、未荘の人々は痛快にして恐ろしく、阿Qも痛快にして恐ろしかった。しかし四日後、阿Qは夜中に突然逮捕され、県庁所在地に連行された。

阿Qは、拘置所の小さな部屋に押し込められた。同室の二人は田舎の者らしく、一人は祖父の代に未払いだった土地代を払えと拳人旦那から迫られ、もう一人は何のためか分からないという。二人は阿Qに尋ねたので、阿Qは、「俺が謀反を企てたからさ」と答えた。つまり、阿Qは、逮捕された原因は自分が革命に参加したいからだと思いつけているのである。

午後尋問のため、大広間に連れてきた。上座には、頭をつるつるにそり上げた老人が座っていた。下座には、兵士が一行に並び、両側には、十数人の長衣姿の人々が立ち、その中にも頭をそり上げた者もあり、偽毛唐のように30センチほどの髪を肩に垂らしている者もいる。彼らは一様に凶悪な人相で、阿Qを睨みつけている。阿Qもこれらの人物は偉い人に違いないと分かり、膝の関節が勝手に緩んでしまったので、そのまま跪いた。「立って話せ。跪くな」と怒鳴られても、阿Qはやはり立っていられず、そのまま跪く姿となってしまった。「今お前の仲間たちはどこにおる？」と老人が尋ねた。「何ですか」と、阿Qはさっぱり分からないの

で聞き返した。老人は「あの晩に趙家を略奪した仲間だ」と説明した。阿Qは、「連中は俺を呼びに来なかった。連中は自分で運んで行った」と怒り出した。次の日もまた同じ場所で同じ尋問を受けた。阿Qはこれ以上話すことは何もなかったため、一枚の紙を眼の前に差し出され、サインを求められた。阿Qは字を書けないから、丸を画くことが許されたが、筆はひどく重いばかりか、ぶるぶる揺れて、丸く画けなかった。彼は恥ずかしく思い、悩んだ。この尋問は、いい加減で、判決は真実に基づくことなく、権力で下された。この章では、正義のない世の中で、革命とはいえ、すべて力関係が物を言う社会を如実に描き出しているのである。

その夜、拳人旦那は隊長に腹を立て、眠れなかった。拳人旦那は盗品捜査を第一にと主張したが、隊長は犯人の公開処刑を第一にと主張したからであった。隊長は最近拳人旦那をひどく軽んじており、机を叩き、椅子を蹴飛ばしてこう言った。「一罰百戒だ、良いか、わしが革命党になってから二十日も経ったのに、強盗事件十数件、すべて未解決で、わしのメンツはどうなるだ。犯人を逮捕したら、あんたが邪魔に来る。だめだめ、これはわしの管轄なんだ」。拳人旦那は困ってしまったが、それでも自説を堅持し、盗品捜査をしないのなら、自分は直ちに民政補佐の職務を辞すると言った。ところが隊長は「ご自由になされ」と答えた。もちろん、結局趙旦那は辞職しなかった。このように、拳人旦那は自分の失ったものにしか関心がない。隊長は自分たちの略奪行為を阿Qに濡れ衣を着せ、急いで阿Qを処刑したいと考えている。

阿Qは黒い字が書かれている白いチョッキを着せられ、両手も後ろに縛られて、役所の外へと連行された。そして、幌なしの車に乗せられ、数名の短い上着の人も彼と一緒に座った。前には鉄砲を背負っている兵士がおり、両側には大勢の見物衆が口を開けており、後ろは見えなかった。これで阿Qはやっとこれは首切りに行くのだと、はっと気づいた。彼がぼんやりと左右を見渡すと、道ばたの群衆の中に呉おばさんを発見した。阿Qは突然意気地なしの自分が恥かしくなった。芝居の文句を唸ろうとしたが、つまらない文句しか思い出せないため、彼は「二十年経てば再び一人の……」と言ったこともない言葉を半分口にした。「いいぞ」見物衆の中から、狼の吠えるような声が喝采した。その瞬間、彼は四年前のことを思い出した。彼は山麓で餓えた狼に出会い、狼はいつまでも近づけず遠からずの距離で後をつけ、彼の肉を食おうとしていた。彼は死ぬほど恐かったが、運良く手に鉈を一丁握っていたので、未荘まで無事に帰った。あの狼の目は永遠に忘れられない。そして今再び彼はその後見たこともないさらに恐ろしい眼を見た。それは鈍くまた鋭利で、彼の言葉を噛み砕いてしまっただけでなく、彼の肉体以外のものをも噛み砕こうとし、いつまでも遠からず近からずの距離で後をつけてくる者である。これらの眼は一体化したかの様子で、すでにそこで彼の魂に食らいついていた。「助けて……」、だが、阿Qは口に出さなかった。彼はとっくに眼の前が真っ暗となり、全身があたかも粉みじんに散ったかのような気がしていた。ここで、阿Qは見物衆の狼のような吠え声を聞いて、四年前に出会った恐ろしい狼の眼を思い出し、自分の魂が噛み砕かれているように感じた。その恐ろしい狼は閑人、見物衆のことを指しているであろう。

魯迅は小説の最後で、処刑の影響を次のように語っている。影響があると言えば、最大だっ

たのは拳人旦那で、ついに盗品捜査も行われなかったので、一家を挙げて号泣した。その次は趙家で、秀才が略奪に遭ったことで県庁所在地に通報に行った際、弁髪を切られ、そのうえ20貫の懸賞金まで払わされたので、一家を挙げて号泣した。その日以来、趙家は次第に旧王朝の遺臣の気配が漂い始めた。阿Qについての世論はと言えば、未荘では、異論があるはずもなく、処刑されたのが当然だと思っている。なぜなら、阿Qが悪い、悪くなかったらどうして銃殺などされようか。だが県庁所在地の世論は、芳しくなく、多くの人々が不満だった。それは、銃殺は首切りほど面白くないし、しかもあの死刑囚ときたら、長く引き回しだったというのに、芝居の文句も唸れなかった。ついて回って、くたびれもうけだったのだからである。

このことから分かるように、最後になっても、田舎でも、町でも、そして庶民も、地位のある人も、覚醒した人は全くいなかったということである。

## 5. まとめ

以上で検討してきたように、この小説は、精神勝利法、恋愛と暮らしの問題、革命の問題など3つのテーマを中心に展開している。またそれぞれのテーマが占める分量を見ると、全文で34頁あるが、精神勝利法はわずか5頁程度しかなく、恋愛と暮らしの問題は11頁、革命は12頁であり、精神勝利法の分量がかなり少ない<sup>2)</sup>。したがって、精神勝利法の典型を描いていると考えれば、小説全体に整合性が見られない。しかし、全体の構造を貫いているものが他にある。それは閑人・見物衆のまなざし、盗み・略奪の問題、革命の動機などである。つまり小説は、以下のように多層構造をなしており、その構造の中に阿Qの意味が隠されていたのである。

その一は閑人・見物衆のまなざしの変化である。代田は次のように指摘している。「阿Qの場合は、欠点を指摘されたり、挫折した時、それをそれと自覚せず、ごまかして心理的に逆転してしまう「精神優越法」あるいは「精神勝利法」の代表選手として扱われてきた」(80頁)。確かに阿Qにはいくつかの精神勝利法が見られる。しかし、それは阿Qを軽蔑し、馬鹿にする閑人たちが存在しているからである。未荘は、中国農村社会の縮図であり、そこには趙旦那、銭旦那という上層の人もいれば、意地悪な閑人もいる、さらに社会の底辺で生きる阿Qのような日雇い労働者もいる。その社会で、阿Qは家もなく祠に住むしかない、また姓を名乗るのも許されない。何より常に村の閑人たちに嘲られ、侮辱され、さらには殴られる。それを耐えていくには、せめて精神上でも楽にする必要がある。閑人たちが阿Qを見ている軽蔑のまなざしが阿Qの精神勝利法を作り出しているのである。もちろん、閑人たちのまなざしは変化もいていく。求愛が失敗し、仕事を失った阿Qは、県庁所在地に行き、拳人旦那のお屋敷で働き、そして盗みの手伝いで盗品の古着を持って帰ると、閑人たちに尊敬のまなざしを向けられた。しかし、阿Qが二度と盗みに関わりたくないと言うと、閑人たちはまたすぐさま阿Qを軽蔑するようになった。つまり、閑人たちにとって、盗みの働きをする人こそ尊敬に値するのである。そしてその後、阿Qが略奪の罪を着せられ、処刑場へと連行されていく際に、蟻のような

見物衆は、阿Qが何の芝居の文句を唸るか、首がどのように切られるかにしか興味がなかった。阿Qの「二十年経てば再び一人の……」の言葉を聞いて、見物衆は狼の吼えるような声で喝采した。その喝采の声で、阿Qは恐ろしい狼の眼を思い出した。それが彼の肉体をも、そして魂をも噛み砕こうとするものである。この恐ろしい狼は、まさに他人の肉体的苦痛、精神的苦痛を感じない閑人・見物衆のことを指しているのであろう。

その二は、盗み・略奪の行為の脱階層化である。それは社会の底辺に生きる弱者のみならず、階層を超えて存在しており、さらに革命党も例外ではない。阿Qは、仕事を失い、食べ物がなく、静修庵の大根畑の大根を盗んだ。また偽毛唐と秀才は、革命の際に、静修庵の宣徳炉を持ち去った。そして革命党は、趙旦那の家を略奪し、しかもその罪を阿Qになすりつけた。

その三は、革命の動機に問題があるということである。これも階層に関係なく存在している問題と言えよう。中国では十九世紀の末から、アヘン戦争、日清戦争の敗北により、領土が分割される危機意識から、清王朝を倒して、近代国民国家を作り上げようとする動きが展開されるようになった。その流れで、1911年に辛亥革命が起きた。この小説はその時期を背景にし、それぞれの階層がどういった動機で革命に参加しようとしたのかを暴いている。社会の底辺層の阿Qは、最初は革命党の首切りを「面白い」と見ていたが、さんざん趙旦那や閑人たちに侮辱された上、やり繰りも苦しくなり、さらに皆に尊敬されていた拳人旦那も革命を恐れている様子を見ると、思わず大声で「謀反だぞ、謀反だぞ」と叫び出した。そのため未荘の人々は、皆、恐怖と哀れなまなざしで彼を見、阿Qは愉快になった。彼の動機は、抑圧された側からの、欲しいものを手に入れ、嫌な奴を倒そうとすることにある。しかし、阿Qは結局革命党に近づくことができず、革命に参加することができなかった。それにもかかわらず、革命党に略奪の罪を着せられ、処刑されることになった。未荘では、他に革命に参加したのは近代的知識人の偽毛唐と伝統的知識人の秀才である。彼らの革命は、ただ静修庵に行き、「皇帝万歳万々歳」の木牌を砕いただけである。その際、骨董品の宣徳炉を持ち去っていた。県庁所在地では、権威者の拳人旦那は、革命党が入城したら、革命党に変身し、民政補佐を務めるが、田舎に隠した財産が略奪されてから、盗品捜査をしてくれない革命党に怒りを覚え、革命に消極的になった。このように、下層の労働者にも、新旧知識人にも、そして上層の権威者にも、革命の動機に問題があり、真の革命者は一人もいないのである。

最後に、小説の終わりに「大団円」にしたのは、作者魯迅の視点によるものであろう。物語の最後になっても、覚醒する人が一人もいなかったことが描かれている。阿Qは、最初は革命に対して批判的な態度を取っていたが、その後革命に参加しようとし、拒否された。皮肉にも革命党に略奪の罪を着せられ、処刑されることになっても、本人は自分が革命に参加したいから処刑されるのだと思い込んでいる。拳人旦那は、革命党が入城する前に、財産を未荘の趙旦那のところに預けたが、結局革命党の略奪に遭い、それを失ってしまった。秀才は、革命党が入城したと聞いて、弁髪を頭のとっぺんにグルグル巻きして、革命に参加したにもかかわらず、結局革命党に弁髪を切られ、懸賞金まで取られてしまった。革命党は、無理矢理に人の弁

髪を切ると同時に、略奪行為をし、しかも人に罪をなすりつけ、処刑してしまう悪党である。知識人は、日和見主義で、革命党が入城したら、革命党に変身し、財産が略奪されたら、また保守的になる。民衆は、愚かで無関心、無感覚で、地位のある人を敬い、自分より弱い者をいじめめる。阿Qの首切りの見物を楽しみにしていたが、結局銃殺となり、見物衆にとって面白くなかった。作者はこれらの人たちの行為とその結末を風刺して大団円にしたのであろう。

すなわち、「閑人・見物衆のまなざし」、「盗み・略奪の問題」、「革命の動機」などの問題が小説の構造を貫いている。そして、いずれも民衆の精神構造に関わる問題となっている。小説の表層を見ると、阿Qのことを語っているが、この場合、むしろ名前を阿貴か阿桂にしたほうが自然であろう。しかし、あえて洋字のQにし、しかも序章でわざわざそれをイギリス流の綴り方Queiを略したものと説明したのは、Queiに意味があると考えられるからである。小説の深層構造を見ると、Queiは英語のquestion（問題）の略だと考えるほうが妥当であろう。つまり、「阿Q」には2つ意味が秘められている。1つは、主人公の阿Qと似たような境遇に置かれている不特定の弱者を指し、弱者は生き残る手段として精神勝利法を有していること。もう1つは、阿Qを「あー、問題だ」という意味で使われていると考えられる。作者は、当時の中国社会に存在している問題、とくに精神的レベルの問題を深く掘り下げ、読者に提示し、以て民衆の覚醒を促そうとしているのであろう。また「閑話休題、言帰正伝」から「正伝」にしたのは、中国社会に閑人・見物衆、盗み・略奪や革命の動機などの問題が存在し、しかもそれらの問題は人々の精神に宿り、魂となって、すでに四千年も続いてきたので、まずそれを直視し、正すべきだという意味であろう。この2つの意味を合わせて、小説の題名を『阿Q正伝』にしたのではないだろうか。

### 【註釈】

- 1) 小説の日本語訳は藤井省三が訳した『阿Q正伝』（2011年）を参考したところが多い。
- 2) 『魯迅作品精選』の作品の頁数による。長江文芸出版社、2006年

### 【参考文献】

- 代田智明 2006 「私たちはみんな阿Qだ」『魯迅を読み解く』東京大学出版会  
童秉国編 2006 『魯迅作品精選』長江文芸出版社  
藤井省三 2011 『阿Q正伝』（翻訳）『故郷/阿Q正伝』光文社  
劉再復 2011 『魯迅論』中信出版社  
魯迅 2006 「俄文訳本『阿Q正伝』序及び著者自叙伝略」『魯迅作品精選』長江文芸出版社  
魯迅 2006 「阿Q正伝の成因」『魯迅作品精選』長江文芸出版社

（令和1年11月28日受理）

